

『文体論研究』目次一覧

号数	発行年	題名	著者名	頁数	分野	
1	1962 / 11	西洋レトリックの輸入	西尾光雄	4	日	
		スタイルにおける芸術意識	鍋島能弘	4	英	
		文学の研究と文体	山本 明	1	独	
		〈講演要旨〉				
		小説の文体	東田千秋	1	英	
		文体論と文章研究	時枝誠記	2	日	
		〈文献紹介〉				
		国語国文学に関するもの (昭 36. 1~37. 1)		4		
		〈会員名簿〉		12		
2	1963 / 5	Thomas Mann におけるライトモチーフ技法の				
		発生と展開	保坂宗重	4	独	
		森鷗外の初期言文一致体	山本 正秀	4	日	
		〈講演要旨〉				
		わが文体論的遍歴	小林英夫	6	言	
		フランス文体論学者の宿命	林 和夫	4	仏	
		表現の層と文体の構造	山本忠雄	4	英	
		Cicero の文体	泉井久之助	3	言	
		〈文献紹介〉				
		日本における英語文体論文献 (1961. 6~1963. 1)		2		
フランスの比較文体論	田島 宏	1				
R. Wells: Nominal and Verbal Style	牧野成一	1				
〈第 2 回大会発表要旨〉		7 本	8			
3	1963 / 3	文章と文体	江湖山恒明	5	国	
		文章心理学への批判をめぐって	安本美典	6	心	
		文体論の領域	両角克夫	5	英	
		文体論の統整	石垣幸雄	3	言	
		続稿 わが文体論的遍歴	小林英夫	5	言	
		〈文献紹介〉				
		国語国文学に関するもの (昭 37~38. 6)		3		
		Leo Spitzer: American Advertising Explained as				
		Popular Art	内田市五郎	2		
		広告と文体論	林 長男	3	英	
〈第 3 回大会発表要旨〉		5 本	4			
4	1964 / 6	断絶の文体 (一)	吉川幸次郎	5	中	
		小説における文形態の抽出例—接続助詞「と」				
		をめぐって	根岸正純	6	日	
		長塚 節の文体	岡田英雄	6	日	
		近代小説技法としての話法	窪川英水	4	仏	
		現代アメリカ英語の倒置構文とその style	牧野成一	9	英	
		続々稿 わが文体論的遍歴	小林英夫	4	言	
		〈講演要旨〉				

号数	発行年	題名	著者名	頁数	分野
4	1964 / 6	修善寺大患は漱石文体に影響をおよぼしたか 作品の文体—Elizabeth Bowen の場合— 〈文献紹介〉 日本における英語文体論文献 (1963. 1~1964. 5) Hans J. Bayer: 「ドイツ中世初期および最盛期に おける世俗叙事詩の文体の研究」 (I) <i>A Book List on Style and Stylistics in English, French, German Language and Literature.</i> (II) <i>A Book List of Stylistic Studies on English and American Authors.</i> (天理大学出版部) 〈第4回大会発表要旨〉 5本	小林英夫	2	言 英
			東田千秋	2	
			小野寺和夫	1	
			河原重清	1 8	
5	1964 / 11	断絶の文体 (二) 文体研究私見 文章論と文体論—国語学の立場から— Phonostylistics の中心問題の一つ 曲流文の文体論的考察 Jerome の文体 Anotine de La Sale “Le Petit Jehan de Saintré” の 文体の一特徴について 終稿 わが文体論的遍歴 〈講演要旨〉 文章心理学と修辞心理学 文体雑感 体験話法に関する雑感 〈文体・文章研究文献〉 (国語国文学関係) (昭 38~39. 8) 〈第5回大会発表要旨〉 4本	吉川幸次郎	5	中 日
			佐藤 茂	4	
			徳田政信	3	日 英
			中川 清	6	
			森田良行	5	日 英
			難波利夫	4	
			大高順雄	7	仏 言
			小林英夫	5	
			波多野完治	6	心 独
			佐藤晃一	3	
徳沢得二	6				
				4	
				3	
6	1965 / 6	仮名文より和漢混淆文へ 断絶の文体 (三) 「文体を論ずる」ということ 作者不明作品の作者を推定する方法 古今集の擬人法 岸田戯曲の文体 <i>The Good Earth</i> の文章構造 Some Aspects of the Prose Style of Doctor Johnson 〈講演要旨〉 東独公用文体の特質について 〈対談〉 国風文体論のゆくえ (林巨樹、野村精一) 〈文体論関係文献〉 英語 (1964. 6-1965. 5)、ドイツ語 (1963-1964. 8)、 フランス語 (1962-1964) 〈第6回大会発表要旨〉 10本	久松潜一	7	独
			吉川幸次郎	5	
			池田陸喜	6	
			樺島忠夫	7	
			坂井洲二	9	
			岡田英雄	6	
			大谷泰照	8	
			鈴木知行	7	
			福本喜之助	4	
				4	
	3				
	3				
	12				
7	1965 / 11	英文人の文体観 (一)	矢野禾積	6	英

号数	発行年	題名	著者名	頁数	分野
7	1965 / 11	わが国における体験話法の研究について	徳沢得二	7	独
		語彙調査の一例	小林英夫	8	言
		『古事記』の歌謡の引用形式	西尾光雄	7	日
		Bret Harte の Narrative—文語体の諸相	丹下省吾	9	英
		South American Romances の言語	益田 出	9	英
		Style in Robert Herrick's Lyrics —analysis and comparison—	今西雅昭	10	英
		若きヘッセの“Aus Kinderzeiten”について 文体論的分析の試み(続き)	小島公一郎	9	独
		ゲーテと文体 <文献紹介>	岩村行雄	6	独
		Stylistics, Linguistics and Literary Criticism <文体論関係文献>	中川 清	9	英
		国語・国文学(昭39.6-40.8) フランス語・フランス文学(1960-1964) <第7回大会発表要旨> 6本		4 13 8	
8	1966 / 6	英文人の文体観(二)	矢野禾積	9	英
		宮沢賢治のスタイル—『春と修羅』第一集を中心に—	原 子朗	10	日
		文体論と文章論	市川 孝	9	日
		中国文体論	森川久二郎	6	中
		Emma の文体に見られる Austen のヒューマニズム	東田千秋	10	英
		若きヘッセの“Aus Kinderzeiten”について 文体論的分析の試み(続き)	小島公一郎	8	独
		<講演要旨>			
		語り物としてのホメーロス	松平千秋	10	古
		文芸批評としての文体論—Henry James, J. M. Murry, Bonamy Dobrée を中心として—	吉武好孝	3	英
		<文献紹介> Stylistics, Linguistics and Literary Criticism (II) <第8回大会発表要旨> 8本	中川 清	7 11	英
9	1966 / 11	いわゆる体言止めについて	田辺正男	14	日
		唐物語の文体	梶尾 武	8	中
		Thomas Hardy's Word Style	辰宮 栄	15	英
		若きヘッセの“Aus Kinderzeiten”について 文体論的分析の試み(最終)	小島公一郎	11	独
		<講演要旨>			
		詩雑感 <文献紹介>	村野四郎	7	詩人
Phonostylistics の方法論の一つ <第9回大会発表要旨> 8本	中川 清	8 12	英		
10	1967 / 6	文体の形成—直裁と利一の場合—	両角克夫	8	英
		文体の一断面—“もじり”について—	富永道夫	9	言
		フォークナーの長文の特徴	花本金吾	9	英
		William Sansom の文体	加藤知巳	13	英

号数	発行年	題名	著者名	頁数	分野
10	1967 / 6	ゲーテの「庶出の娘」の文体 —象徴語分析の試み— (1) 〈講演要旨〉 文章の流れ：『かげろふ日記』の場合 ゴールズワージーの小説の文体的側面観 〈講演要旨（創立5周年記念）〉 文体論を国語教育にどう生かすか 文体と思想 〈第10回大会発表要旨〉	小林健祐	11	独
			西尾光雄	8	日英
			矢野万里	9	日英
			増淵恒吉	3	日英
			篠田一士	1	日英
		8本	13		
11	1967 / 11	ドイツ語名詞文体の問題について ゲーテの「庶出の娘」の文体 (2) 芥川龍之介の方法と文体 『東洋の秋』の文章 『月に吠える』スタイルの一面 —一人称表現について— 変形文法と文体論 〈講演要旨〉 文体素について	福本喜之助	18	独
			小林健祐	12	独
			根岸正純	11	日
			中村 明	14	日
			米倉 巖	10	日英
			牧野成一	8	日英
		小林英夫	12	言	
12	1968 / 6	ゲーテの「庶出の娘」の文体 (3) Le Cimetièrre Marin と décasyllabe Goethe の “Iphigenic auf Tauris” に見られる 合成語について David Lodge の小説の文体 〈講演要旨〉 Shakespeare における修辭と文体 文体比較法の一つの試み 「デゴザル」体から「である」体へ 〈講演要旨〉 The American Style: A Quick Look at One American Humorist, S. J. Perelman 〈書評〉 原 子朗『文体序説』 桑門俊成『国語文体論の方法』 〈第11回大会発表要旨〉 8本 〈第12回大会発表要旨〉 5本	小林健祐	9	独
			滑川明彦	9	仏
			斉藤美美子	9	独
			東田千秋	7	英
			山本忠雄	9	英
			堀川直義	8	心
			山本正秀	10	日
			P. K. Pehda	1	米
			中川時雄	2	英
			東田千秋	4	英
		17	14		
13	1968 / 11	川端康成の文体—『雪国』と『山の音』— 『明暗』の文体 近代詩人の色彩感—萩原朔太郎を中心として— Madame Bovary の風景描写 (1) Style と Écriture—フランス近代・現代小説の時称・ 人称の文体論的処理について— A Sentimental Journey の構造と文体 Burns の詩の文体 William Faulkner の作品の終末の文の特質	根岸正純	12	日
			前川清太郎	8	日
			米倉 巖	11	日
			加藤節子	14	仏
			田島 宏	6	仏
			谷本誠剛	9	英
			難波利夫	10	英
			中川 清	12	英

号数	発行年	題名	著者名	頁数	分野
13	1968 / 11	<i>The Great Gatsby</i> の文体 A Trial Research in Semi-Automatic Abstracting by Lexicological and Stylistic Methods (第 13 回大会発表要旨) 4 本	東田 千秋	10	英
			林 四郎	14 9	日
14	1969 / 6	Shakespeare の文体 — <i>Macbeth</i> をめぐる問題と rhyme— 祝宴の場とマクベスのことば —Stylistic Explication の試み— 聖書の側からみたフォークナー『響きと怒り』 Emerson の文体—修辞を中心に— ヴェリエ・ド・リラダンの散文のリズムについて デイドロにおける文体の観念 <i>Madame Bovary</i> の風景描写 (2) 昭和期詩人の「赤」と「黒」 —重治・光晴・達治・中也・道造— 平均文長の諸相—川端康成における一つの試み— 文体論研究の現状—日本— 変形文法と文体論 中国における文体論 <i>Sons and Lovers</i> の文体語彙について	伊藤 隆	12	英
			今西雅章	11	英
			菊池 昭	11	英
			中沢生子	15	英
			宮内侑子	10	仏
			中川久定	11	仏
			加藤節子	15	仏
			米倉 巖	13	日
			中村 明	15	日
			根岸正純	14	日
			小野経男	10	英
			蘆田孝昭	10	中 英
			武内昭人	3	英
			15	1969 / 11	“Four Meetings” における Scenic Imagery について Thomas Hardy の散文文体—Figures of Speech— Wallace Stevens の後期の詩に見られる文体の変化 Mary Webb の自然— <i>Gone to Earth</i> の文体論的考察— The Beast in the Jungle という Imagery の二重構造 —内包的記号から外延的実体への展開を辿って— ブレヒトの詩と言葉—「ドイツ戦争習作」をめぐって Arno Schmidt のことば = Sprache 詞書の文章の問題 —『佐喜草』と『葉山の栞』について— (講演要旨) 人魚の行方 —Matthew Arnold と Henry James と T. S. Eliot—
辰宮 栄	16	英			
小山 驥	13	英			
須賀有加子	14	英			
出原博明	9	英			
八木 浩	11	独			
仁科武光	14	独			
宮崎莊平	11	日			
工藤好美	14	英			
16	1970 / 10	俳句の切字と表現の流れ—Dynamics の観点から— 三島由紀夫における文体—その要旨と付随的な いくつかの問題— ヘンリー・ジェイムズ「ねじの廻転」の文体について バーンズの書翰詩の文体 ホーフマンスタールの詩の文体における形容詞の用法 ドイツ名詞文体にあらわれた抽象名詞の機能について 数に見られる文体論 文体論の反省 (講演要旨) 久遠の女性			
			原 子朗	12	日
			市川嘉章	17	英
			難波利夫	11	英
			位野木絏一	17	独
			寺川 央	12	独
			窪川英水	9	仏
			両角克夫	11	英
			石田憲次	11	英

号数	発行年	題名	著者名	頁数	分野
17	1971 / 8	文体論的ロレンス論	二宮尊道	10	英
		ワーズワスの“Michael: A Pastoral Poem”の文体 —Explicatory Criticismの試み—	今西雅章	17	英
		Henry Fieldingの演劇的文体	谷本誠剛	13	英
		Henry Jamesの <i>The Aspern Papers</i> における 情意的な表現	市川嘉章	18	英
		<i>To the Lighthouse</i> のReported Speechと間接話法 Represented Speechの一考察	中川ゆきこ	32	英
		—作者=作中人物=読者の問題—	谷村淳次郎	14	英
		伊藤静雄の文体	塩田 勉	20	英
		『青猫』スタイルの一側面			
		—そのリズムの構造について—	米倉 巖	15	日
		ドイツ語名詞構文の文体的価値について	寺川 央	14	独
“Hymnisch”に至る若きゲオルゲのFormwilleと Stilwille—ボードレール翻訳のスタイル—	林 秀之	16	仏		
18	1972 / 1	バーンズ長篇詩の文体	難波利夫	15	英
		ドイツ語の“Soweit wären wir”という文型について	浜川祥枝	28	独
		『狐物語』一枝篇の文体論的考察	原野 昇	14	日
		伊藤整の文体観—『小説の方法』を中心として—	塩田 勉	13	英
		<i>Chance</i> の文体	須賀有加子	10	英
19	1972 / 11	統計的文体論管見	木下光一	20	仏
		淡い否定と憂愁—Heineの二つの詩に見るPrivativa— <i>Walden</i> の文体	平川信弘	10	独
		C. Brontëの文体—原点と虚構—	中沢生子	17	英
		Housemanの詩の行頭の‘And’について	柳 五郎	17	英
		バーンズ四行詩の文体	武内 豊	18	英
		〈講演要旨〉	難波利夫	18	英
		漢詩の英訳をめぐって	御輿員三	7	英
20	1973 / 12	KITと文体との邂逅	平川信弘	13	独
		ホーフマンスタールのノベレ			
		『バツソソピエール元帥の体験』の様式について	向井惣恵	28	独
		Oscar Wildeの文体	木越富士彦	21	英
		“The Secret Sharer”における自己探求と文体	須賀有加子	20	英
		バーンズのソングの文体	難波利夫	19	英
〈講演要旨〉					
記述の文体・操作の文体	渡辺 実	14	日		
21	1974 / 12	ハウスマンの詩用語について	竹内 豊	9	英
		〈講演要旨〉			
		明治の文体革命	山本正秀	17	日
		〈シンポ〉文体論の可能性			
		I 文体と文体研究	森 晴秀	7	英
II 文体論研究の動向	豊田昌倫	11	英		
III 小説の文体とディッケンズ	竹内 章	14	英		

号数	発行年	題名	著者名	頁数	分野	
21	1974 / 12	IV 新言語的アプローチ	笈 寿雄	13	言	
		Bulletin 1	最近の英語文体論関係文献一覧	東田千秋	5	英
			十年このかた(ドイツ語圏の場合)	平川信弘	7	独
		フランス文体論文献解題	滑川 明彦	6	仏	
22	1976 / 3	Shakespeare の <i>The Sonnets</i> の表現と技法 —Leishman の 97, 98 番の解釈と評価を中心に— 小説における部分と全体—Henry James の短篇 <i>In the Cage</i> を例に取り上げて— <i>Almayer's Folly</i> の技巧と文体 〈シンポ〉翻訳の文章と文体 明治初期における翻訳と文体—序にかえて— 『鳥留好語』の文章と文体 シェイクスピアの翻訳—坪内逍遙の場合— 聖書翻訳の文体(明治訳について)	今西雅章	21	英	
			市川嘉章	16	英	
			須賀有加子	14	英	
			松村昌家	10	英	
			大井浩二	11	英	
				藤田 実	15	英
				佐藤全弘	28	英
		Bulletin 2	文学的文体論の展望	野村精一	5	日
			ドイツ文体論の近況(その二)	平川信弘	7	独
			能の文体『山姥』と『野宮』について(特別研究発表) Christopher Powell 氏の講演 “Language in Britain”の要旨	モニカ・ペータ	9	
		今西雅章	6	英		
23 ・ 24	1977 / 11	安西冬衛と大陸—比較文体論の契機— 文体の形成— <i>Mary, A Fiction</i> をめぐって— バーンズ歌謡論 意識の流れ小説の文体—ジョイス、ウルフ、 フォークナーの叙述の方法をめぐって— <i>Roderick Random</i> における自由間接文体と Lesage の <i>L'Histoire de Gil Blas</i> ムージルの「愛の完成」の文体とその主題技法 文体的逸脱としての方言的表現について 〈講演要旨〉 風骨について 小説の文体について 〈会員名簿〉	蘆田孝昭	15	中	
			東田千秋	15	英	
			難波利夫	20	英	
			谷村淳次郎	18	英	
			井出鹿雄	22	仏	
				宮下健三	19	独
				平川信弘	10	独
				星川清孝	13	中
				鍋島能弘	16	英
					15	
25	1978 / 12	万葉集の形容詞について	西尾光雄	11	日	
		題材の文体—谷崎潤一郎の文体に即して—	飯田晴巳	18	日	
		Wordsworth の詩的ヴィジョンの言葉の質について	中川時雄	15	英	
		<i>The Road from Colonus</i> の文体	千葉 功	17	英	
		Faulkner 作品の未完結性と文体	谷村淳次郎	21	英	
		A. シリトー「鰥夫の息子」の文体	塩田 勉	15	英	
		換喩と隠喩について	平川信弘	9		
Some Remarks on Speech Levels in English	H. E. Wilkins	16	独			
26	1979 / 10	断定的表現—大岡昇平の文体	橘 豊	17	日	

号数	発行年	題名	著者名	頁数	分野
26	1979 / 10	小説における「じゅうたんの模様」、構造主義、 そして文体論—Henry James と Tzvetan Todorov の方法論を比べて— 「内的独白」文体の内的構造 <i>Wulf and Eadwacer</i> について 「柔石の文体」—「人鬼与他的妻的故事」から 「為奴隷の母親」へ— Meditation and Description in Tu Fu's “Thoughts Written While Travelling at Night”	市川嘉章	19	英
			藤平誠二	19	
			長谷川 寛	14	
			中野 清	10	中
			William Tay	12	
27	1980 / 11	A Study of Joyce's Early Revision of <i>Ulysses</i> <i>Hamlet</i> における造語と文体 ディッケンズの作品における「状況語」 D. H. ロレンス: 'The Prussian Officer' のテーマと文体 水滸伝の描写技法 —金聖嘆「讀第五才書法を中心に」— 小学生の詩にみられる比喩表現について 文体論再考 新しい文学研究法をめぐって	鈴木孝志	10	英
			岡村俊明	17	英
			吉田孝夫	16	英
			塩田 勉	16	英
			中野 清	13	中
			古岩井嘉蓉子	17	日
			豊田昌倫	11	英
宮下健三	12	独			
28	1981 / 11	ブレイクの寓意画的的文章 「ハード・タイムズ」—レトリックにみる作者の感情 類廃期の小説「ドリアン・グレイの肖像」の一考察 —鏡の心象とパストラル喪失をめぐって— 「失われた時を求めて」における口語と文語 三島由紀夫の手法—追叙表現について—	大熊昭信	15	英
			寺内 孝	19	英
			片山 好	16	英
			久野 誠	12	仏
			下河部行輝	13	日
29	1982 / 11	欽定訳聖書にみられる常套語句 “it came to passe” についての一考察 <i>Macbeth</i> の「恐怖」の文体 <i>Great Expectations</i> にみられる表現技法について Eliot と Pater—“personality” の周辺— 新聞、雑誌のフランス語における受身形の用法 〈第40回大会：特定テーマ研究 (1)〉 比喩的表現と文体 中国語と比喩表現 真の闇から心の闇へ —比喩的表現と文体・文学史— 修辞学の復権 比喩表現と文体	水谷顯一	14	英
			岡村俊明	18	英
			山本恒義	15	英
			森岡 伸	16	英
			住谷在昶	17	仏
			山本 明	1	独
			沢山晴三郎	3	中
			原 子朗	3	日
			福井芳男	1	仏
			三宅雅明	4	英
30	1983 / 11	<i>Dombey and Son</i> の笑いの文体 Dickens's <i>Hard Times</i> and the OED <i>As You Like It</i> における人生の概念と対照表現 リファテールの「読者」 譬え話の構造分析 料理法における英語の文体	吉田孝夫	18	英
			寺内 孝	14	英
			熊谷次紘	18	英
			小林孝夫	9	仏
			橋本邦彦	22	
			門倉弘枝	14	英

号数	発行年	題名	著者名	頁数	分野
30	1983 / 11	中国現代詩のリズムについて 「ジンプリツィシムス」の様式とテーマ <文献紹介> G. W. Turner: <i>Stylistics</i> について 林 長男、塩谷秀男、加藤英治、岡田 毅 <会員名簿>	三木直大 岩井智子	12 16	中
				15 30	英
31	1984 / 11	Pater の <i>Style</i> について <i>Pride and Prejudice</i> にみる〈ずれ〉 日本語の表現法とその英訳の分析 隠喩の根拠—inopia 理論再考— スタンダードにおける頻出語《ROUGIR》、《PÂLIR》 の意味するもの—副題・感覚の透明性— 武勲詩『オランジュ占領』の非武勲詩的特徴 —フランス中世文学作品のジャンル再考察のために— 日記の記録性と文学性 —『紫式部日記』の時間表現にみられる文体的特徴—	小田原克行 田口 和泉 古岩井嘉蓉子 大浜 博	18 15 18	英 英 日
			河野英二	20	仏
			原野 昇	16	仏
			村井幹子	18	日
32	1985 / 11	リルケ『新詩集』の文体 An Interpretation of the Style of <i>You Should Have Seen the Mess</i> by Muriel Spark 文章の種類と言語的性格 —新聞各面の文章を比較する— Joyce Carol Oates 表現効果 —副詞・副詞相当語句を中心に— Essai sur le roman à la seconde personne — <i>La Modification</i> de Michel Butor— 初期、井伏鱒二の文体 —『炭鉱地帯病院』を中心として— <文献解題> Leo Spitzer: <i>Essays on English and American Literature</i> (上)	杉浦謙介 門倉弘枝 小宮千鶴子 山本 哲 井上範夫 佐藤嗣男	18 22 18 15 17 16	独 英 日 英 仏 日
			林 長男	16	英
			長谷川 寛	7	英
			日下洋右	15	英
			長谷川泰司	12	仏
			水谷顯一 齊藤俊一 飯田 操	22 17 20	英 英 英
33	1986 / 11	『ベーオウルフ』—剣とその詩的表現— フラナリー・オコナーの小説における手法と文体 — <i>The Violent Bear It Away</i> を中心に— 谷崎潤一郎「細雪」の仏訳について —日仏比較文体論研究ノート— 英訳聖書にみられる diakonos, diakoneō と doulos, douleuō の訳語について 「結婚十の楽しみ」の文体と手法 <i>Othello</i> における Paradox <文献解題> Leo Spitzer: <i>Essays on English and American Literature</i> (中)	林 長男	32	英
34	1987 / 11	A Stylistic Study of <i>The Catcher in the Rye</i>			

号数	発行年	題名	著者名	頁数	分野
34	1987 / 11	—Around Thing-Centeredness— Arthur Rimbaud の詩における破壊と創造の語り・文体 〈文献解題〉	有井松雄 前川泰子	14 20	英 仏
		Leo Spitzer: <i>Essays on English and American Literature</i> (下)	林 長男	43	英
35	1988 / 11	ヘンリー・ジェイムズ後期の文体 —その小説の芸術性について— Hermann Claudius と Robert Graves 詩のことば Edward Thomas における“earth”の多義性について 表現としての枕草子—「方弘は」の段の「笑い」— Walden の文体 日本文学の仏訳文体—英訳との比較文体論の試み— 〈文献解題〉	阿出川祐子 後 恵子 飯田 操 小森 潔 井上博嗣 滑川明彦	14 17 16 14 19 15	英 独 英 日 英 仏
		Leo Spitzer: <i>Essays on English and American Literature</i> (続)	林 長男	32	英
36	1990 / 3	漱石文学に現れた女性像とその比喩表現 Description of Nature in Hardy's <i>The Return of the Native</i> and Lawrence's <i>The Rainbow</i> 「のですか」の疑問文をめぐって—意味論と文体論— 救済の拒絶—横光利一「春は馬車に乗って」に おける『聖書』の文体と論理の改変— フロベールと文体—消える言葉／顕れる言葉— D. H. ロレンスの「狐」における換喩展開上の隠喩的 効果について	楊 麗雅 瀬良晴子 小熊和郎 藏中しのぶ 渡辺良二 大滝祥子	18 12 12 14 12 12	日 英 日 日 仏 英
		ヨハネ福音書 1章5節にみられる“ou katelaben”の 和訳の問題点について The Technique of Chaucer's Color Expressions 鏡花の戯曲の文体—「夜叉ヶ池」の漢語めぐって— 〈第 55 回大会研究発表要旨〉 7 本	水谷顯一 吉村耕治 下河部行輝	14 11 13	英 英 日
37	1991 / 3	大和物語の文体と語りの場 <i>Richard III</i> から <i>The Tempest</i> へ —造語と新語義を中心に— 文体と文化—空間の美学— F. Bacon: <i>Essays</i> の比喩について <i>The Grapes of Wrath</i> における女性像 —文体的特徴をめぐって— 『冬物語』における劇的対話 —文体的特異性とその意味をめぐって— 〈講演要旨〉	岡山美樹 岡村俊明 滑川明彦 西岡啓治 井上博嗣 畠田豊文	18 15 14 12 15 13	日 英 仏 日 英 日
		話法と視点 〈文献解題〉 Leo Spitzer: <i>Essays on English and American Literature</i> (続) 〈第 56 回大会研究発表要旨〉 9 本	磯谷 孝 林 長男	13 11	露 英
				4	

号数	発行年	題名	著者名	頁数	分野
37	1991 / 3	〈第 57 回大会研究発表要旨〉 7 本 〈第 58 回大会研究発表要旨〉 10 本		4 5	
38	1992 / 3	辻邦生とスタンダールにおける「奇妙な」 もしくは“singulier” シェイクスピアの最初期の作品『ヘンリ六世』 第一部の文体について 源氏物語、宇治十帖の表現技法 —「昔の人」の用語をめぐる— ポール・ヴェルレーヌ「キリストへのソネ」に おけるソネ形式 文体と創造的思惟—S. マラルメの詩学— 〈特別記念論文〉 文体論の展開—逸脱文体論と前景化論— 〈座談会〉「日本文体論学会の回顧と展望」 〈日本文体論学会・大会記録〉 〈日本文体論学会・略年表〉 〈第 59 回大会研究発表要旨〉 7 本 〈第 60 回大会研究発表要旨〉 7 本	河野英二 岡村俊明 阿久沢忠 前川泰子 宗像衣子 波多野完治	14 15 13 13 16 6 30 19 5 4	仏 英 日 仏 仏 6 30 19 5 4
39	1993 / 3	文法から修辞へ—提喻論から見た一つの文彩論— 古井由吉の文体—〈囲み〉と〈訝り〉の方法を中心に— 作品の効果と読書行為 —徳田秋声『仮装人物』の作品世界— <i>The Adventures of Huckleberry Finn</i> における情景描写 『舞姫』の文体 〈文献紹介〉: Situation について —村田 穆: 私の『おくのほそ道』 〈記念講演要旨〉 日本文体論の回顧 中国中世の美文読本—『帝徳録』について— D. H. ローレンスとイタリア—文体論的考察— 能本(いわゆる謡曲文)の表現 —その抽象性と演劇性— 〈第 61 回大会研究発表要旨〉 6 本 〈第 62 回大会研究発表要旨〉 9 本	大浜 博 根岸正純 和田敦彦 井上博嗣 前川清太郎 林 長男 松本 淳 興膳 宏 島村 馨 味方 健	14 13 12 15 13 8 4 6 7 6 5 5	仏 日 日 英 日 英 英 中 英 能 5 5
40	1994 / 3	新訳聖書にみられる“en kuriō”の訳語について スペイン語前置形容詞の、名詞への後置の可能性に ついて <i>King Richard II</i> における饒舌と沈黙 モダリテートからみたドイツ語の体験話法について 映画に触発された文体の諸相 —モダニズム文学の一側面— 「文体」と芸術ないし文化の様式 —マラルメの詩的言語の在り方— 〈記念講演〉	水谷顯一 原 誠 飯田 操 黒沢宏和 十重田裕一 宗像衣子	13 13 18 12 13 15	英 西 英 独 日 仏

号数	発行年	題名	著者名	頁数	分野
40	1994 / 3	翻訳と文体—わが PRAETERITA— 〈第 63 回大会研究発表要旨〉 11 本 〈第 64 回大会研究発表要旨〉 7 本	齋藤襄治	16 7 5	英
41	1995 / 3	小説のセンテンス—莫言の文体— ジャンヌ・ダルク書簡文の文体 フォークナーの文体と現象学的世界観 小説を対象とした表現特性抽出の試み —幸田文と円地文子を例として— <i>Histoire Comique</i> における表現の特徴について 短篇物語の文体構成—堤中納言程の懸想— <i>Emma</i> に見られる Jane Austen の手法について 〈第 65 回大会研究発表要旨〉 10 本 〈第 66 回大会研究発表要旨〉 6 本 〈シンポ〉『坊ちゃん』をめぐって (藤尾健剛、滑川明彦、中川時雄)	山本 明 福本直之 桑原敏郎 水藤新子 水野綾子 保科 恵 古賀裕子	12 14 12 12 12 11 16 6 5 1	中 仏 英 日 仏 日 英
42	1996 / 3	ベッカーの文体論—文体論史のために— 『海潮音』における「故国」の文体の意義 —高踏派と象徴派の統合としての《民謡》の試み— 形式と意味 —新約聖書にみられる“sarx”を例にして— スタンダールの小説諸作品における「レティサンス」 〈書評〉 中村 明：『日本語の文体 —文芸作品の表現をめぐって—』 原 子朗：『修辞学の詩的研究』 ウンベルト・エーコ (上村忠雄・廣石正和訳)： 『完全言語の探求』 完全言語の見果てぬ夢 —あるいは言語としての文体について— 三浦敏明：『R. L. スティーヴンソンの語法と文体』 〈文体論関係新刊紹介 (1990-1994)〉 〈会員著書一覧 (1990-1995)〉 〈第 67 回大会研究発表要旨〉 8 本 〈第 68 回大会研究発表要旨〉 9 本	山本 明 小澤次郎 水谷顯一 河野英二 林 巨樹 橋 豊 磯谷 孝 小池一夫	13 9 13 14 4 3 8 4 4 9 6	独 日 英 仏 日 日 露 英
43	1997 / 3	Charles Dickens, <i>Great Expectations</i> の分析 —計算機文体論への挑戦— モダリテートからみたドイツ語の間接話法について フランス語のモダリティ表現 レトリックとしてのスキーマ —樋口一葉「十三夜」の場合— 「ポートベロ・ロード」の方法 〈書評〉 Jean Jacques Weber (ed.), <i>The Stylistics Reader: From Roman Jakobson to the Present</i> (1996) について	岡田 毅 黒沢宏和 曾我祐典 山本雅子 杉山克枝 志賀 謙	16 10 10 12 12 11	英 独 仏 日 英 英

号数	発行年	題名	著者名	頁数	分野
43	1997 / 3	野村雅昭：『落語のレトリック』 〈会員著書一覧（1996）〉 〈第 69 回大会研究発表要旨〉 9 本 〈第 70 回大会研究発表要旨〉 9 本	木村義之	6 3 6 6	日
44	1998 / 3	Color Expressions in Lažamon's <i>Brut Beowulf</i> に於ける Prosopopoeia について —Wæpen を中心に— 〈語り〉としての漫画の構造 —〈笑い〉の意味するもの— 段落構造の把握と国語教育への応用 —「天声人語」を題材にして— カール・ビューラーの『言語理論』とレトリック 「マンフレッド」の受容と変容 —バイロン、ハイネ、鷗外を中心に— 〈書評〉 Laurent Perrin, <i>L'ironie mise en trope</i> (1996) （『トロープとしてのイロニー』） 〈海外学会報告〉 「第二回国際文学意味論学会」に参加して 〈会員著書一覧（1997）〉 〈第 71 回大会研究発表要旨〉 8 本 〈第 72 回大会研究発表要旨〉 10 本	吉村耕治 長谷川 寛 古岩井嘉蓉子 立川和美 山取 清 原田範行 大浜 博 菊池繁夫	11 13 14 14 13 12 5 2 5 6	英 英 日 日 独 独 仏 英
45	1999 / 3	文体意識の衰弱 いまなぜシャルル・バイイカ？ —フランス文体論再生の動き— 『リチャード三世』における比喩表現 <i>The Catcher in the Rye</i> における誇張表現 驚異創造の技法からみたアポリネールの文体 —短篇 <i>Que vlo-ve?</i> の方法— 新約聖書にみられる特徴的な対比について 『たけくらべ』における内面の発生地点、その形成法 太宰治「走れメロス」 〈会員著書一覧（1998）〉 〈第 73 回大会研究発表要旨〉 7 本 〈第 74 回大会研究発表要旨〉 10 本	原 子朗 田島 宏 石川淑子 八尋春海 伊勢 晃 水谷顯一 野網摩利子 塩田 勉	9 8 13 9 12 11 13 11 3 5 6	日 仏 英 英 仏 英 日 英
46	2003 / 3	中心文及びトピックセンテンスに関する再考察 —中核文設定の提案— 幸田文のオノマトペ —「既成語の結合」を対象にして— ブルーストの文体形成とラスキン翻訳 —比喩を中心として— 伝達動詞の日独対照の試み —小説およびその翻訳を利用して— 結末の文体—ボードレール『パリの憂鬱』の場合—	立川和美 水藤新子 和田恵里 西嶋義憲 白須貴志	14 13 14 19 14	日 日 仏 独 仏

号数	発行年	題名	著者名	頁数	分野
46	2003 / 3	〈講演要旨〉			
		作者の介入と作品の統一	森 晴秀	7	英
		〈シンポ〉川端康成『雪国』の表現をめぐって (川端香男里、小森陽一、中山眞彦、蘆田孝昭、原 子朗)		48	
		〈第 75 回大会研究発表要旨〉 8 本		5	
		〈第 76 回大会研究発表要旨〉 12 本		7	
47	2001 / 3	文脈と文脈論	蘆田孝昭	18	中
		Some Stylistic Observations on the Language of Joseph Conrad's <i>Heart of Darkness</i>	Noriko MURATA	12	英
		三島由紀夫『新聞紙』に於ける時間の表現 —概念的隠喩を用いた分析—	杉本 巧	11	日
		2 <i>Henry IV</i> における Rumour	飯田 操	13	英
		登場人物への名付けと作品世界の行方	高橋久美子	10	独
		縁談の文体論—『細雪』における〈うわさ〉による 縁談のストーリー形成について—	畑中基紀	12	日
		土左日記の文体 —否定辞「で」「ず」「ずして」を使った構文から—	阿久澤 忠	12	日
		対話、ジャンル、スタイル —テキスト空間の広がりについて—	髭 郁彦	14	仏
		Keat's Use of Words in "The Eve of St. Agnes"	Akiko OKADA	12	英
		〈講演要旨〉			
		明治初期讃美歌の成立とその流れ —“Nearer, my God! to thee” の和訳からみて—	茂 洋	9	
		〈シンポ〉ことばと笑い (野村雅昭、宮下志朗、植田渥雄、山田泰司、磯谷 孝)		42	
		〈第 77 回大会研究発表要旨〉 10 本		6	
		〈第 78 回大会研究発表要旨〉 8 本		5	
48	2002 / 3	名詞表現の叙述性	志賀 謙	17	英
		テキストにおける結束構造に関する一考察 —文段成立のマーカ―としての「のだ」文の機能—	立川和美	16	日
		語り手と「である」系文末との関係 —夏目漱石『吾輩は猫である』『三四郎』『道草』、 芥川龍之介『羅生門』を例として—	石出靖雄	10	日
		言語表現形式としての形容詞の述語的用法と 副詞的用法—日独両語対照の視点から—	柳 武司	15	独
		メディア言語におけるメタファー —京都議定書についての日・米・英の記事をめぐって—	瀬良晴子	14	英
		日本語の発話対—勧誘とその応答—	川井章弘	12	日
		Ernest Hemingway の文体再考 —Thought Presentation を中心に—	倉林秀男	11	英
		移動を表す動詞の意味派生に関する一考察 —go を中心に—	松久保暁子	11	英
		〈講演要旨〉			
		〈幻想詩〉の可能性	以倉紘平	6	詩人
		〈第 79 回大会研究発表要旨〉 8 本		5	

号数	発行年	題名	著者名	頁数	分野
51	2005 / 3	Semantische Untersuchungen zur Modusopposition beim Nebensatz	黒沢宏和	13	独
		ヘミングウェイの“The Short Happy Life of Francis Macomber”に見られる衝突の構造	倉林秀男	13	英
		聖書に見られる動物名称の訳語について 〈特別講演要旨〉	水谷顯一	13	英
		ヘルマン・ヘッセの手紙の文体	田中 裕	11	独
		〈第 85 大会研究発表要旨〉	11 本	6	
〈第 86 大会研究発表要旨〉	9 本	7			